

「アラブ諸国の社会変動と民主化」

池内恵（東京大学先端科学技術研究センター・准教授）

1. 「大規模デモ」の出現とアラブ諸国の政権動揺

(1) 情報空間の変容：累積的

- ①衛星放送（アル＝ジャジーラは 1996 年開局）
→外部からの情報流入、政府の統制から自由な情報入手の経路
- ②携帯電話（2000 年前後から急速に普及）→SMS による「スマートモブ」
- ③パソコンが 2000 年代半ばから大衆化→2008 年頃からラップトップ・W i f i
→フェースブック、ツイッターがアラビア語併用可に

(2) 「若者 (shabab)」という政治勢力の登場

「30 歳以下」(60%)、「35 歳以下」(70%以上)

(3) 情報の「入手」と「発信」+「つながり」

(4) アラブ諸国の権威主義体制の根幹の動揺・喪失

統治の手法・基盤 ①ばらまき、②恐怖、③情報統制

= 「旧世代」はこれを当然と受け止めていた（あるいは公的に異議申し立てをしていなかった）→それなりの正統性（アラブ諸国の政権の正統性の不確かさは 1960 年代から指摘されていたが・・・）

→「大規模デモ」による市民の権利意識の表出により
この「3 点セット」で成り立つ体制の正統性が揺らぎ
具体的にこの三つの統治の手法の行使に支障が生じた

2. 各国の政治展開の分類

(1) 「移行期政治プロセス」への「移行」モデル エジプト・チュニジア

(2) 「内戦・カオス」モデル リビア、イエメン、シリア

→国民統合と部族

(3) 「抑圧強化の下での「改革」モデル サウジアラビア、バーレーン、GCC

→「順番」では最後、当面は安定が国際社会の利益

諸勢力の「つながり」がどこで出てくるか

「人権」問題での国際非難・問題化への危険性（F 1、ワールドカップ等）

「対イラン」カードがどう跳ね返るか

3. 各国の政治展開を分ける要因

(1) 中間層の厚みと成熟度

市民社会（知的水準、経済的な一定の自立、議論の空間の存在）

(2) 国民統合の度合い

国民意識の形成⇔部族・宗派・民族・地域による分断・分裂

(3) 政軍関係

①国民軍と政権軍 エジプトの国民軍としての性質

②国家防衛隊・大統領防衛隊（等）→国軍に並行する精鋭組織の規模と質

③征服王朝の性質からの脱皮がなされるか（しかし脱皮するとさらに市民の権利意識は高まる） サウジ、バーレーン

④傭兵による国民軍の代替→当面の政権安定、国民の疎外、弾圧の過酷化、究極の状況での信頼性の不透明 リビア、バーレーン、サウジ？

⑤軍の政権からの「自立性」 経済基盤、非政治化の過程の有無（エジプトの事例）

(4) 米国をはじめとする国際社会との関係

① 「親米」国家のアイロニー

*人権・民主主義などの普遍的規範に一定程度の顧慮が必要。また、米国との関係の中で、理念定着が進む。

*米国による政治的・軍事的な影響力強い。→チュニジア、エジプト＝米政策の変更が政権への引導、抑制要因；バーレーン、サウジアラビア＝米政権による黙認、一定の抑制？（今後の国際的紛糾？）

② 「反米」国家の有利と不利

リビア（早期の制裁、軍事制裁へ）、シリア「改革派アサド」の賞味期限切れ

*非難・制裁慣れ？ 自律経済？（シリア）

4. サウジとGCC諸国への波及をどう見通すか

(1) サウジ的解決策？ 資金力と人口増

(2) 東部州／シーア派、ヒジャーズ地方、南部国境／イエメン問題

(3) 征服王朝から「国民」へ？

(4) 君主制による正統性→後継者問題

(5) 国軍と国家防衛隊

(6) 対米関係

(7) 湾岸型「つながり」はどこに生まれるか→国際的評価

5. 移行期政治プロセスの中でのイスラーム主義

(1) 民主化・政治的自由化→イスラーム主義の伸長・主張の高まり＝必然

→「民主化」プロセスがイスラーム主義と自由主義的政治原則の対立の局面を越えるか

宗教・宗教権威をめぐる表現・批判の自由、改宗、結婚、異教徒＝社会不安の起爆剤

(2) 「イスラーム世界における民主主義」の模索

- ①政教分離（世俗国家）に踏み切る
- ②イスラーム主義による、基本的人権への一定の制約を課す
- ③自由主義原則による、イスラーム主義への一定の制約を課す

(3) **宗派紛争**の危険

エジプトのコプト教問題

→欧米市民社会の反応→広範なイスラーム主義的組織を刺激する可能性

政教関係のスケープゴート

イスラーム思想の近代的革新の難しさ

6. 中東国際政治秩序の動揺

(1) 全体の見通し

- ①アラブ国際政治二つの極：エジプトとサウジ
「アラブ冷戦」？「新バグダード条約」？
- ②「中東和平プロセス」の各種前提喪失→イスラエルの安全保障環境の激変

(2) エジプト外交の変化

対イラン関係改善

ハマースへの／からの歩み寄り

ガザ封鎖の緩和

ナイル川溪谷の諸問題 スーダン、水利

(3) サウジ・GCCの「対シーア派・対イラン」戦略

サウジ、クウェート、バーレーン、イラク 「湾岸アラブ・シーア派の孤」を刺激

「対イラン」カードの危険

「新バグダード条約」 モロッコ、ヨルダンへのGCC拡大提案、王制連合

(4) イスラエル

- ①エジプト 対イラン、対ハマースの政策転換 当面は外交のカード／合理的判断
- ②ヨルダン 土着部族系とパレスチナ系の潜在的対立、中東和平プロセスの限界
- ③シリア 中東和平への妨害能力劇的に低下・ハマースの自立化（エジプト・カタールへ）
- ④イスラエルとパレスチナ 共通して「大規模デモ」の危機→和平交渉への駆動要因／制約

9月国連安保理での「加盟承認決議」(不可能)・国連総会での「国家承認決議」（あり得る→実質的意味は？ イスラエルの象徴的な孤立）

「1967年国境」原則をめぐる対米関係・対西欧関係